

大江戸馬鹿草子

かんべむさむ





大江戸馬鹿草子

かんべむさむ

講談社

大江戸馬鹿草子

昭和六一年一月二五日 第一刷発行

著 者 かんべむさし

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―一二二／郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五―一二二(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

定 価 一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

©Musashi Kanbe 1986, Printed in Japan

目次

プロローグ 五

第一章 確立 九

第二章 発展 三九

第三章 矛盾 八〇

第四章 混迷 一一九

第五章 崩壊 一七六

エピローグ 二二一

装画 装幀
田代 卓
荒川 じんぺい

大江戸馬鹿草子

プロローグ

琴^{こと}、三味線^{しゃみせん}、鼓^{つづみ}などに乗せてのテーマ・ソング、オーケストラ演奏をバックに、賑^{にぎ}やかにカッ
ト・イン。

へアチャラカ、スチャラカ、

ホチャラカ、ヘチャラカ。

空が晴れば、心も軽い。

心軽けりや、足取りはずむ。

はずむ足取り、東にむけて、

行くはお江戸か、望みの町か。

何があるやら、わかりはせぬが、

何があるうと、笑って暮らせば、

それがすなわち、浮世の極楽。

それじゃ早速、始めましょうか。

浮いた浮いたで、始めましょうか。

アチャラカ、スチャラカ、

ホチャラカ、ヘチャラカ。

ムチャラカ、スチャラカ、

コチャラカ、ケチャラカ……

ゆつくりとフェイド・アウトしていき、期待感を高めるしばらくの静寂があつて……

映画でいうなら、タイトル・シーンが終わると。

漫画であるなら、表紙をめくり最初のページを見てみると。

とにかく冒頭は東海道、相模^{さがみ}の国は小田原の町に近い場であつた。

快晴の空がひろがり、そこからバン・ダウンすると松並木の続く街道となり、手前のまだ新しい^{いちゃい}一里塚^{つか}には榎^{えのき}の木が立っている。

その街道を西の方から、坊主が三人やつてき

た。それぞれ同じ衣を着、同じような背丈をし、顔にも大した特徴はなさそうに見えるから、別の名のある者達でもなさそうだ。

「聞いたか、聞いたか」

その証拠に、なかのひとりすなわち明礬坊甲念が、きわめて陳腐な問いかけで話を始めた。

「先月というから慶長十年の四月、家康公は三男秀忠様に、征夷大將軍の位をお譲りなされたということだ。これはすなわち」

そこで言葉を切ると、乙念がかんたかい声でひとことはさみ、そのあとを丙念が陽気な口調でつづけた。

「関ヶ原で握った天下の権を」

「子々孫々に至るまで徳川様が、独占なさろうという御決意御決意。この先まだしばらくは豊臣方との争いなどあろうにしても、さてさて、騒乱の世もようやくおさまりだしたということじゃ」

三人ビタリと足をとめ、ミディウム・サイズで正面をむいて唱和した。

「いや、おめでとうござりまする」

そしてほっとしたように身体のをぬき、張っていた声も調子を落として喋りだした。

「ああ、これで時代背景の説明がすんだ。

だから、わしらの出番は早くも終わったということになるのだが、このままひっこむのはおもしろくない。何か無駄話でもしようではないか」

「うむ、甲念の言うことには一理がある。

いくら幕開き専門の聞いたか坊主連とはいえ、わしらにだって固有の人生もあれば、独特の体験談もあるというもの。ときには、それを語りたいと思うのが人情なのだからな」

「何と、乙念」

ふたたび小田原の町へむかって歩きだし、ここから先はカメラのサイズおよびアングルは御隨意にという気で、丙念が提案した。

「独特の体験談といえば、あの京の三条で出会った霧の一件。あれなどは、語れば珍し好きの世間の者に、受けるのではないかと思うが、どうじゃ

な」

「おお、そのことそのこと」

甲念が大きくかぶりをふり、乙念もまた声をかんだかくして言った。

「いや、ほんにあの霧の一件なるものは不思議にして奇妙なる体験であつた。何しろ、我われ三人が小田原での出番を与えられ、日時に遅れてはならじと、あたふたと大坂を出立した。そして京の町をぬけ、いよいよ東海道にかからんと鴨川を越えかけた途端、あらあら不思議あら不思議」

「それまで晴れわたっていた空がにわかにかきくもり、といつて雷雨豪雨の降るでもなく、恐ろしく濃い、しかもおどろおどろしい黄色の霧があたりを包んでしまったのだからな」

「あのととき甲念、おまえが突然妙なたとえを使つてあの霧の濃さを表現したが、あれは何と言つたのであつたかな」

丙念の問いに、甲念は首をひねつた。

「うむ、エスエフにでも出てきそうな怪しい霧だ

と言つたのだが、いまから考えれば、わしはなぜそういうたとえを使つたのか、いや、正確には使えたのがさっぱりわからん。エスエフなどという言葉を、この時代の坊主が知っているわけもないのにな……」

三人はしばらく黙り、そのうち乙念が何かを思ひ出したという顔で口をひらいた。

「そういえばあのととき、わしも妙な言葉を頭に思いうかべていたぞ」

「妙な言葉？」

ふたりが反復し、乙念はうなずいた。

「そうなのだ。何でも、黄色は注意近寄るなという意味を示す色だから、ここをぬけるのなら真面目な方どうぞそのお覚悟でとかいう、そんな言葉をだ」

「何のことなのだ、それは」

「さあ……、無茶苦茶になりますよという無責任宣言のつもりではないのかな……」

乙念が口をもごもごさせ、すると今度は丙念が

あつと声をあげた。

「たつたいま、わしも思い出した。あのとき、あの霧のなかで、わしは頭のなかにひとつのお告げを聞いたのだった。そうだそうだ、わしらの出番はまだ終わってはいなかった。あのお告げに従うならば、わしらはこの場においてあとひとつ、紹介をしなければならぬことになっていたのだったぞ」

「お告げ？」

「紹介？」

「そうとも、紹介だ」

丙念は断言し、そろそろ街道に沿った町にかかり、そこから賑わいの声などが聞こえてきたこともあつて足をとめ、ひと息ついて声を張りあげた。

「いや、こう申している間に早や小田原の町に到着した。我ら三人、とりあえずこれにて失礼をいたすが、それについては別の三人連れを紹介しておかなければあいならぬ」

道端に人だかりのあるのを、手の平を上にもむけて差し示し、丙念は言った。

「あの入だかりに入り混じり、何だかんだと騒ぐ三人。ひとり侍、ひとりは坊主、そしてひとりは町者なれど、これがいまからの主人公。まずはおみしりおかれてこの先の末永き御最良を」

「隅から隅まで」と甲念。

「ズズ、ズーイ」と乙念。

「お願い願ひあげ、たあてまつりまするう」

両手をひろげて丙念が決め、三人が揃って頭をさげる。そしてその瞬間、彼らは消えて、場面は次へと移っていたのだった。本篇はそこから始められるのである。

第一章 確立

1

「さあ、買ってくれ買ってくれ。買ってくれないなら、さっさとあっちへ行ってくれ」

町はずれの道ばた、松の木ねまたの根方に座り込み、ボサボサ頭の少年がひらきなおったように叫んでいる。縄なわの帯をしめた短い着物は泥まみれ垢まみれ。裸足はだしの脚にも傷やカサブタがいつぱいで、誰の眼にもステロタイプ版「気の毒な子」と見える。

そいつが自分の前に小さな桶おけをひとつ置き、その縁ふちを棒で叩きながら何かを売ろうとしているのだった。

「おいらはな、これを売らないじゃあ、明日とい

わず今夜の飯も食えないんだ。おいらだけじゃない、病氣のおつかあと腹を減らしてビイビイ泣く妹も、またまたボウフラの浮く水を飲んで下痢ゲリしなくちゃあならないんだ。上もビイビイ下もビイビイ、人間の笛ができてしまうんだ。さあ、これだけ言っても、誰一人買ってやろうという大人はいないのか。どいつもこいつも、人でなしばかりなのか。え、どうなんだよ」

ぐるりと周囲をとりまいた大人達は、ニヤニヤ笑ったりひそひそささやきあったりし、そのうち、なかの一人が声をかけた。

「買え買えと言ったって、それが何なのかわからないでは買いうがないじゃないか。

全体、それは何なんだい」

「だから、さっきから言ってるじゃあないか。おいらがさっきその海で取ってきた魚だよ。親を思う小倅こがれが、冷たい水をものともせず、肩までつかって取ってきた、孝行魚とはこのことだい」

「魚はわかってるが、どうして一匹じゃなくて

切り身なんだ。せめて姿形がわかれば食う気にもなろうが、怪し気な、面妖^{めんよう}な、いやらしい桃色の切り身がゴロンじゃあ、第一薄気味が悪いじゃないか。ねえ、皆さん」

そうだそうだの声が起き、すると少年は、

「へん」

こぶしで鼻水をぬぐい、啖^{たん}阿^かを切った。

「それなら買わない。いくらおいらが困ってるつても、食ってあたるような物は売らないんだ。怖^{こも}けりや、食うなってるんだ」

そしてぐるりと人垣を見まわし、それぞれ異なつた旅姿の三人連れを見つけると、その中央の侍に視線をとめて声を変えた。

「ねえ、お侍さん、あんたなら怖くはないだろう。頼むから買ってくれよ。これ、煮ても焼いてもいけるし、何ならこのまま、ちよつと塩をすりこんで食ったつてうまいんだ。さっき、おいらが切れっ端^{はじ}を自分で食ったんだから、嘘じゃあないよ」

「うむ」

言われてその侍は口のなかで小さくうなり、鋭くそがれたような頬を片手で軽く叩いて、切れ長の眼を一瞬ひからせた。そして、つのる興味を無理に押さえるような、低いぼそぼそとした声で聞いた。

「半解^{はんかい}殿、どうしよう。おもしろそうだから買って食ってみようか」

「オホッ」

半解殿と呼ばれた右隣の坊主がとぼけた声を出し、じゃがいも頭をふつてこたえた。

「それはもう香取^{かとり}様の御随意じゃが、それにしても、何やらわからぬ物を食おうとは御醉^{ごすい}狂^{きやう}なことだ」

「その、何やらわからん怪し気なところがうまそうなのだ。そなたは食いたくないか」

「いやいや」

半解は首をふり、テヘッと自分の額を叩いて、周囲に宣言するように言った。

「無寺無宗にして無位無冠、ただひたすら流れのままに生きるこの一知坊半解、魚類であるうが獸類であるうが、口に入るときが縁のとき、ありがたくいただきますぞ」

「忠助、おまえはどうだ」

「へいへい、私はもう」

左隣にいたチビで頭のでかい若者が、早くも期待の唾を口の中に湧かせたらしく、ごくりと喉を鳴らしてこたえた。

「こういう不思議な物を食うのも人生の修行、実は誰も買わんのなら私が買おうかと思っていたくらいでして」

「人生の修行とは大仰な、ただおもしろそうだから食うだけだ。いや、しかし、これで決まった。

おい小僧、買ってやるぞ」

「あつ、ありがとう。これで助かりました。お侍さん、お代はお気持で結構だよ」

「うむ、しからば」

着物のたもとから適当にビタ銭を出して少年に

与え、香取静之進は忠助をうながした。

「どこかで塩をもらって、そのまま食うとしよう。おい、その桶を持て」

「へい」

人垣が崩れて見物の野次馬達はてんでに散り、三人が町へと歩きだす。

それにしても、半解が言った。

「京の三条で怪しい霧に包まれて以来、この道中、何やら妙なことばかりじゃな」

「たとえば？」

静之進の、それが癖であるらしい面倒臭そうな問いに、忠助がこたえた。

「ほら、あのあとようやく霧が晴れたときに、道端におかしなカタツムリが見えたじゃありませんか。あの、からくり仕掛のようにギイギイと音を立てていた小さな奴」

「ああ、あれか」

静之進はかすかにうなずき、そういえばあのカタツムリ、霧が晴れるとともに草むらに消えてし

まったが、何、別に大した物でもあるまいと、とりあえずの解釈をくだした。

「大方、近江の国友村の鉄砲鍛冶か誰かが、手ずさびで作ったおもちやだろう。それがたまたま落ちていたんだ」

「しかし香取様」

半解がちらりと静之進に眼をやり、からかうように口をはさんだ。

「あなた様がそういう気のない物の言い方をなさるときは、実は心中大きく気にしている証拠。これはあの霧以来、それまで後になり先になりしていた我われ三人が同行を始めて今日までの道中で、愚僧、ほば見当がつくようになったのじゃが、いかがかな」

「ふむ」

静之進は鼻を鳴らし、しかし半解の推測があたっていたのか、ほっと吐息をもらした。

「気になるといえば気になる。そもそも、あのカタツムリなる物は、なぜあんなにのろのろと動い

ていたのだ。あれではまるで止まっているようにさえ見えたではないか」

静之進は今度は顎をなでてしばらく考え、それから話に切りをつけようとするように声を大きくした。

「ま、そういう物もいたということだ。それはともかく、そのあたりの旅籠で塩をもらって、そいつを食おう。ここまで来れば江戸はもうすぐそこだ。食って力をつけて、先を急ぐとしようではないか」

「へい、それでは」

忠助が一軒の旅籠に近づいて声をかけ、二人がそれにつづく。そして、話がついたらしく、なかに姿を消す。ちなみに、その彼らの氏素性を列挙しておくならば、ざっとまあ、こういう具合である。

関ヶ原の戦いで主を失い浪人となった香取静之進、三十歳少し過ぎ。

何やら凄い能力を内にひめつつ、ひとりて生き

るトボケ坊主、一知坊半解。

歳は四十二か三か。

大坂あたりの小商人の子で、親と喧嘩をし江戸で一旗を出発した、ネズミの忠助。二十代中頃のチョコマカ男。

この時代の多くの者同様、彼らはこれから江戸へ行き、それぞれの道を歩もうとしている。仕官出世か悟りと布教か、あるいは豪商大儲けの道なのか。それはいまはまだわからない。彼ら自身にさえ、見当がつけにくい。

しかしともあれ、道中同行の仲となった三人は、江戸へ江戸へと進んでいく。

その途中にはさまった、これはちょっとしたエピソードの場なのである。

「大丈夫かなあ」

しばらくののち、あとをつけてきたらしくさきほどの少年が往来に立つて首をのぼし、彼らの消えた旅籠を覗くようにして気配をうかがっていた。

「大きな魚の胴から下が、浜に打ち上げられて腐ってた。おいらが味見したなんて嘘っぱち。まだ食えそうなところだけ切り取って売ったんだけど、まさか死にやしないだろうなあ」

あれは何という魚なのかな。鰻かな、それとも鮫かな。彼はつぶやき、それから握った手をひらいて銭を見、ニヤッと笑った。

「何でもいいや、売ったらこっちの物だ。さあ、これでまたバクチでもしてこよう！」
そのまま駆け去って行ったのである。

2

「そうれ、ケンケンケン」

「は、セツセツセツ」

「ケンケン」

「セツセツ」

「ケン」

「セツセツ」

江戸の町に、建設の槌音が響いている。

天正十八年の家康入府以来、絶えることなく続けられている、力強い町づくりの響きである。

そして、それまで城といっても粗末な土手と板ぶき屋根の建物、町といっても田舎村と漁村程度しかなかったこの土地に、ひとつの大きな都市が姿をみせ始めている。

その有様を、上空はるかから俯瞰で撮影した超コマ落としてのフィルムによって真面目に見るならば、概略こんな様子なのである。

……まず城を中心にして家臣団の屋敷を要所に配置し、軍事面の配慮をすませてから民を集めるための「動き」が始まる。

のちの日本橋付近にあたる平川の河口から江戸城まで、東から西へ物資輸送用の堀をひらくべく、人夫の大軍がセカセカと働きだしたと見えるのは、これがすなわち道三堀。

ほとんど同時に、城の入口御門から東へむけての「本町」町割りが始められ、侍が叫んでいる足輕が走っている誰が動いている彼が転んだ。幅広

い道路が縦横に走り、四十丈四方の住居区画が数多くつくられていく。

その各区画に、通りに面する形で家が建ちだすとすればそれは当然口の字型の家並みとなり、真中の土地が空く理屈。そこは会所地と呼ばれ、下水やごみ溜め場の設けられた、のちには長屋密集の場となる日陰裏。

そのうち道三堀近辺と本町とが一体になり、堀に沿っては材木町ができ舟町ができ、そこにどんな物資がいかなる輸送手段で集積されたのかは、町名によっても一目瞭然。

人が集まり物が売買され、犬が吠えたて猫が飛びのき、賑わいはまずこのあたりからひろがりだしている。

幕府がひらかれてからは開発にも拍車がかかり、いわゆる下町がつくられ始め、城を核とした右まわり渦巻き形の形で新たに堀が掘られていった。その渦巻き堀を貫いて放射状に延びるのが、これすなわち東海・奥州・中山・甲州などの諸街